

世界遺産登録に向けて

鶴子银山(10) 田中清六の渡海まで

田中清六は、豊臣秀吉の甥である関白秀次の御咄衆として仕え、諸国の動静や政治・軍事の相談役となり、知行200石を賜っていました。文禄4(1595)年7月、秀次が高野山で自害すると、御咄衆の多くは処刑や流罪となりますが、清六は秀吉によつて「知行はそのまま遣わすべく」とされ、所領は安堵(保証)されています。このことをみても、秀吉から信頼されていたことがうかがえます。しかし、清六はこれを辞退します。

そして、慶長3(1598)年9月秀吉が没すると、清六は上杉景勝の動静を徳川家康に逐次知らせ、会津周辺の諸侯には家康の意向を伝えるようになります。

慶長5(1600)年7月、景勝討伐のため会津に出陣していた家康が、石田三成挙兵の報に急遽反転攻勢できたのは、清六が前もって山形城主最上義光を先鋒とし、南部・秋田・戸沢氏など諸侯が会津へ攻め入るよう準備をととのえたためとされています。

清六は、家康の書状に「関ヶ原の陣立の談合の使、常秀(田中清六)にて候こと」とあるように、合戦勝利に重要

な役割を果たしていたようです。

この論功で家康は清六に、「庄内にて三万石成とも、佐渡にて五千石成とも望み次第」、どちらかを選ぶように言いました。すると清六は、「庄内三万石より佐渡五千石は過分にまさり候」と、佐渡を選びました。

『田中宗親書上』によれば、清六は、「海荒れ申し候に付き…、船は破れ次第申し候ひて渡り申し候」と、この年初冬に佐渡へ渡ってきました。



田中清六が陣屋を構えたとされる
沢根の鶴子集落遠景

◆市役所産業観光部世界遺産推進課
☎63-5136

地域おこし協力隊 退任のぼあつち

「佐渡島での時間は
一生の財産」



相川中心商店街担当
おあわたかふみ
太栗崇文さん

市報さどが届けられる頃には、佐渡を離れていると思います。

佐渡の風土や文化、人柄などに魅了され、この地に住みたい一心で協力隊に応募し、一昨年の11月に着任。昨年4月からは妻と長女も越して来て、家族3人で暮らしていました。任期は最長3年ありますが、任期後の仕事や家族のことを考えた末、任期中の3月末で退任します。

私の担当は相川商店街でした。着任当初、ある方から「商店街の活性化は難しいから、気楽に取り組んで」と言われました。過去に店舗運営に携わった経験はありましたが、与えられた任務は素人同然なので、厳しさは覚悟していました。そのため、肩の力を抜かせようとしてくれたのかもかもしれませんが、担当地域のために力を尽くそうと意気込んで来た出鼻をくじかれたのは確かです。

それでも、観光客に商店街へ足を運んでもらおうと飲食店の方に佐渡金银山にちなんだメニューを作っていただったり、次世代リーダーの育成を目指して商店主の方らと勉強会を開催したりと、いろいろな方の協力を得て活動を展開することができました。まだ緒に就いたばかりのものがあるにもかかわらず、道半ばで佐渡に背を向けることに対してとても心苦しい気持ちがあります。

各隊員には任期後の定住が期待されているため、結果的に私は期待に沿うことができませんでした。しかし、私にとつて佐渡での生活は、酸いも甘いもありましたが、掛け替えのない時間でした。地域のために何ができるか、何をしなければいけないかを考え、行動する中でたくさんこのことに気づかせていただきました。この糧と縁は、佐渡金银山にも劣らない財産となり、海を渡らない限り、得られなかったものです。この島で出会えたすべての方にこの場をお借りして感謝を申し上げます。ありがとうございました。

◆市役所産業観光部地域振興課
地域振興係 ☎63-4152